



ブレーメンのおんがくたい

あるところに、年老いたろばがいました。

昔のように働けなくなったので、主人から餌をもらえなくなっていました。

おなかがいすいて困ったろばは、「そうだ、音楽の街ブレーメンに行つて、音楽隊に入れてもらおう。」

家を抜け出し、ブレーメンを目指しました。

しばらく歩くと、元気のない犬がいました。

「ろばは尋ねました。」

「私が年を取つて狩りに行けないものだから、ご主人が私に意地悪をするんだ。そこで逃げてきたのだけど、これからどうしたらいいのだろう。」

「それなら私と一緒に、ブレーメンへ行かないかい?」

「いいね!」

犬はろばとブレーメンを目指しました。

少し行くと、今度は元気のない猫がいました。

「私が年を取つてねずみを取れなくなったものだから、ご主人に追い出されてしまったのさ...」

猫も、ろばと犬の仲間になりました。

また少し行くと、今度は門の上で大きな声で鳴いている鶏に会

いました。

「ご主人が明日、私をスープにしようとしているんだ。それで、最後に鳴いておこうと思って。」

鶏も、ろばと犬と猫の仲間になりました。

長い間歩いたものの、なかなかブレーメンにたどり着けません。

暗くなってきたので、みんなは森の中で眠ろうとしたそのとき...鶏が、遠くに家の明かりを見つけてきました。

近づいて、こっそり窓からのぞいてみると、どうやら泥棒たちが、盗んだごちそうを食べているようです。

動物たちは、

「驚かしてやろう...!」

窓の前に集まり、ろばの上に犬が、犬の上に猫が、猫の上に鶏が乗り、そして...

「ヒーロー! ワンワン!

ニャーゴ! コケコッコー!」

一斉に大声を出しました!

泥棒たちは、恐ろしい鳴き声と窓に映った動物たちの影を見ておぼけだと勘違いし、慌てて外に飛び出してしまいました。

動物たちは残ったご馳走を食べ、おなかがいっぱいになりました。

それからそこで、ずっと幸せに暮らしました。

(おしまい)